聖 餐 式　復活節第 4 主日
特　　祷　復活節第 4 主日 特祷
旧約聖書　エゼキエル書34:1-10
日課詩篇　第 23 篇
使 徒 書　使徒言行録 4:32-37
福 音 書　ヨハネによる福音書 10:11-16

復活節第 4 主日 特祷

永遠の契約の血によって良い羊飼い、主イエス・キリストを死人のうちからよみがえらせられた平和の神よ、どうか、わたしたちをみ旨にかなう者とし、み前に喜ばれるすべての良い業を行わせてくださいますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。**アーメン**

旧約聖書　エゼキエル書34:1-10

1 主の言葉がわたしに臨んだ。2「人の子よ、イスラエルの牧者
たちに対して預言し、牧者である彼らに語りなさい。主なる神
はこう言われる。 災いだ、自分自身を養うイスラエルの牧者
たちは。牧者は群れを養うべきではないか。3 お前たちは乳を飲
み、羊毛を身にまとい、肥えた動物を屠るが、群れを養おうと
はしない。4　お前たちは弱いものを強めず、病めるものをいや
さず、傷ついたものを包んでやらなかった。また、追われたも
のを連れ戻さず、 失われたものを探し求めず、かえって力ず
くで、苛酷に群れを支配した。 5 彼らは飼う者がいないので散

らされ、あらゆる野の獣の餌食となり、ちりぢりになった。
6 わたしの群れは、すべての山、すべての高い丘の上で迷う。
また、わたしの群れは地の全面に散らされ、だれひとり、探す者
もなく、尋ね求める者もない。7 それゆえ、牧者たちよ。主の言葉
を聞け。8 わたしは生きている、と主なる神は言われる。まこ
とに、わたしの群れは略奪にさらされ、わたしの群れは牧者が
いないため、あらゆる野の獣の餌食になろうとしているのに、
わたしの牧者たちは群れを探しもしない。牧者は群れを養わず、
自分自身を養っている。9 それゆえ牧者たちよ、主の言葉を聞
け。10 主なる神はこう言われる。見よ、わたしは牧者たちに立
ち向かう。わたしの群れを彼らの手から求め、彼らに群れを飼
うことをやめさせる。牧者たちが、自分自身を養うことはもは
やできない。わたしが彼らの口から群れを救い出し、彼らの餌食
にはさせないからだ。

《解説》

34:2-10　イスラエルの牧者たち…餌食にはさせない

牧者は羊の群れが盗まれたり、野獣に襲われたりしないよう守った。しかしイスラエルの指導者は彼らにとって羊であるイスラエルの民を守ろうとせず、民は殺され、各地に散らされることになった。指導者たちとは王、祭司や預言者、町の長老のことである。神殿の管理を怠り、神殿を汚している祭司や、楽観的な預言を語り、立場を利用して土地や財産を不当に奪っていた預言者もいた。律法で擁護すべきとされている孤児や寡婦、そして外国人が虐げられている状況を見過ごしにしてきた政治的指導者は、不正な裁判ゆえに特に罪があるとされた。神はそうした悪しき牧者を罰する。

34:8　わたしは生きている

イスラエルの神は生ける神である。人を助けることができない木や石で出来た偶像ではない（20:33）。イザ 44:9-20 参照。

《エゼキエル書について》

◎特徴

エゼキエル書はすべて一人称「私」で書かれており、それが他の預言書にない特徴になっている。つまり、幻、預言、象徴的行為がすべて預言者エゼキエルの視点から語られている。伝統的に解釈が困難とされ、價題視されることもあった。初期のユダヤ教の教師たちには、新しい神殿の幻（40-48 章）が律法にある神殿の記載と矛盾するのが問題であづだ。また、神の栄光を表すエゼキエルの写実的な幻（1.1-28、10.1. 22）が神の神秘について物議をかもすことになるのではないかと危惧された。幻についてあまり深く考えすぎると悪い影響が出ると考えた者もいた。そのため、エゼキエル書は 30 歳を過ぎるまでは読んではならないという教えさえ生まれた。

◎なぜ書かれたのか？

エゼキエルが預言者として選ばれる直前の数年間、ユダ王国はエジプトとバビロニアの覇権争いに巻き込まれていた。B,C.597 年バビロニア帝国はついにユダに侵略し、エルサレムを陥落させる。ヨヤキン王とエゼキエルを含むユダの指導者の多くは捕囚となった。その 10 年後、ユダが反逆するとバビロン王ネブカドネツァルはその反乱を鎮圧し、エルサレムと神殿を破壊して多くの人を捕囚とした。イスラエルの神がそのような恐ろしいことをなぜ許されたのか。エゼキエルの幻と預言はこの疑問に答えようとするものである。エゼキエルはユダとエルサレムが神に罪を犯したゆえに滅びると警告している。困難な状況の中で人々は神に頼ることをせずに、偶像を拝み、外国の力に頼って、律法に従った生活をしてこなかった。自らの罪と反抗のゆえに約束の地と神殿は汚されたのである。それゆえ、「主の栄光」はエルサレムの神殿を去り、神の民はバビロニアに敗れて、捕囚として生きることになった。しかし、エゼキエル書は将来の希望も語づている。神は民を捕囚から解放して、エルサレムに連れ戻し、民は新しい聖所で礼拝し、律法に従った生活を始める。神の栄光がエルサレムに再び輝き、イスラエルと周辺諸国はイスラエルの神以外に神はないと悟ることになるとも語っている。

日課詩篇　第 23 篇

1 主はわたしの牧者 //　わたしは乏しいことがない
2 神はわたしを緑の牧場に伏させ //　憩いの水辺に伴われる
3 神はわたしの魂を生き返らせ //　み名のゆえにわたしを正しい道に導かれる
4 たとえ死の陰の谷を歩んでも、わたしは災いを恐れない //
あなたがわたしとともにおられ、あなたの鞭と杖はわたしを導く
5 あなたは敵の見ている前でわたしのために食卓を整え //
わたしの頭に油を注ぎ、わたしの杯を満たされる
6 神の恵みと慈しみは、生きている限り、わたしに伴い //　わたしは永遠に主の家に住む

《解説》

23:1-3　主は私の牧者…正しい道

詩編では神が王としての権威を持つという表現が多い。一国の王はその国の羊飼いにたとえられ、民を養い守る責任を負っていた（エゼ 34:1-16）。ここでは神が食べ物や飲み物を与えて養い、導き、守り、王としての責任を果たしている。

23:4　鞭…杖

鞭で野獣を撃退し、杖で羊を導く。

23:5　わたしの頭に油を注ぎ

＊客をもてなすために注がれる香油。マタ 26:7、ルカ 7:46 参照。

23:6　わたしは永遠に主の家に住む

「主の家」は神殿のこと。この詩編は神の助けを求めて神殿でささげられた祈りがもとになっているのであろう。神殿は礼拝のための場というだけでなく、身の安全が確保される場でもあった（出 21:14、王上 1:50-53）。エルサレム神殿にある契約の箱を覆う翼のあるケルビムが人々を守ると言われている（36:8、57:2、63:8）。あるいは主の家は神の臨在を象徴的に示しているとも考えられる。

使徒書　使徒言行録 4:32-37

32　信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持
ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた。
33　使徒たちは、大いなる力をもって主イエスの復活を証しし、
皆、人々から非常に好意を持たれていた。34 信者の中には、一人
も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それ
を売っては代金を持ち寄り、35 使徒たちの足もとに置き、その金
は必要に応じて、おのおのに分配されたからである。36　たとえ
ば、レビ族の人で、使徒たちからバルナバ――「慰めの子」と
いう意味――と呼ばれていた、キプロス島生まれのヨセフも、
37　持っていた畑を売り、その代金を持って来て使徒たちの足
もとに置いた。

《解説》

4:33　皆、人々から非常に好意を持たれていた

もしくは「神が使徒たちを非常に祝福された」。＊直訳は、「多大な恩寵（好意、祝福）が彼らすべての上にあった」。

4:36、37　バルナバ…ヨセフ

バルナバは初代教会の重要な指導者となった。パウロの 1 回目の宣教旅行に同行したヨセフはレビ族出身で、この家系は神殿で神に仕えていた（13:1-15:2）。レビ人は、パレスチナで土地を所有することは許されていなかったが、ヨセフはキプロス島に住んでいたので、そこの土地を購入したのだろう。キプロスは地中海の北東にある島で、シリア沿岸の西約 161km にあった。当時はローマ帝国の一部であった。キプロスへのユダヤ人移住は、B.C.2 世紀の半ばには始まっていた。

福音書　ヨハネによる福音書 10:11-16

11「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命
を捨てる。12　羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、
狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。―― 狼
は羊を奪い、また追い散らす。―― 13 彼は雇い人で、羊のこ
とを心にかけていないからである。14　わたしは良い羊飼い
である。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知って
いる。15　それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知
っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。
16 わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その
羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分
ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れに
なる。」

《解説》

10:11　良い羊飼いは羊のために命を捨てる

＊良い羊飼いは神に選ばれたメシアで、悪い羊飼いはイスラエルの指導者にたとえられることがある（エレ 23:1-6、エゼ 34 章）。10:15、13:37、15:13 参照。

10:13　雇い人

イスラエルの指導者を指しているであろう。重要なのは、自分の羊を持つ真の羊飼い（イエス）は、危険が迫っても決して逃げ出さないことである。

10:16　一人の羊飼い…一つの群れ

イエスはイエスに従う者たちが違いを乗り越えて一つの群れになるように導く（ガラ 3:26-29）。

◎羊飼いと強盗のたとえ（10・1～41）…教会の敵・ファリサイ派
イエスは、ファリサイ派の人々を、門を通らないで、囲いを乗り越えて侵入する強盗にたとえて、「羊の囲い」のたとえ（10・１～ 6）を語りますが、彼らは理解できません。わたしは、羊の門である。イエスは良い羊飼い（10・ 7 ～ 21）であるといい、羊のために命を捨てる。囲いに入っていない他の羊（マタイ教会や、ルカ教会員？）も導かなければならない（10・16)。そして死後、再びいのちを受けると、来るべき「死と復活」を預言します。**「17 わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してくださる。18 だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」**
この話を巡って、生死を自由に出来るイエスは悪魔憑きか、狂人か。ユダヤ人の間に、また対立が生じます（10・19 ～ 21)。